

平成30年度 重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）報告

## 23<sup>rd</sup> annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE における研究発表

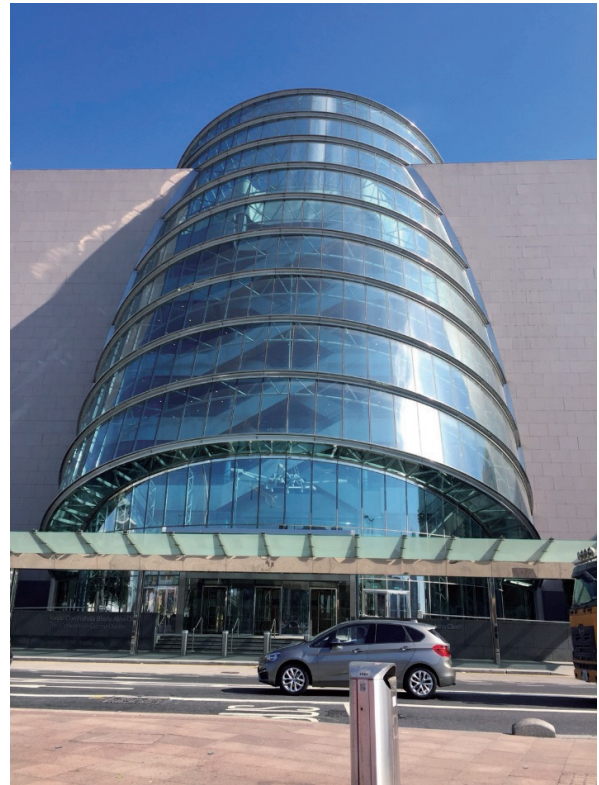
鈴木 智晴\*

### はじめに

平成30年7月4日から平成30年7月7日まで、アイルランドのダブリンにある The CCD (The Convention Centre) にて開催された23<sup>rd</sup> annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE (第23回ヨーロッパスポーツ科学学会) に参加した。平成30年度重点プロジェクト事業（国際学会発表等旅費）の助成を受け、ECSSにて自身の研究成果の一部を発表する機会をいただいた。本稿では、学会大会の様子および発表内容について報告する。

### ECSS について

当学会は、1995年にヨーロッパにおけるスポーツ科学のレベル向上およびスポーツに関する科学的な知識の普及を目的とした国際組織である。現在では、年に一度 Annual Congress を開催している。ヨーロッパを拠点とする学会であるにも関わらず、アメリカ、アジア、オセアニアなど世界中から、スポーツ科学領域の研究者が集い、研究成果の発表および討論が盛んに行なわれている。また、日本人の研究者も数多く参加していた。今回参加した学会大会においても、学会会場はスポーツ科学を研究領域とする研究者や学生をはじめ、運動指導および実践者等の参加者で非常に盛況であった。学会大会中は、一般発表だけでなく「SPORTEX 2018」という協賛企業によるフロアでの展示や実践・体験コーナー等のプログラムが用意されており、企業と研究者による興味深いディスカッションが会場のいたる場所で行われていた。



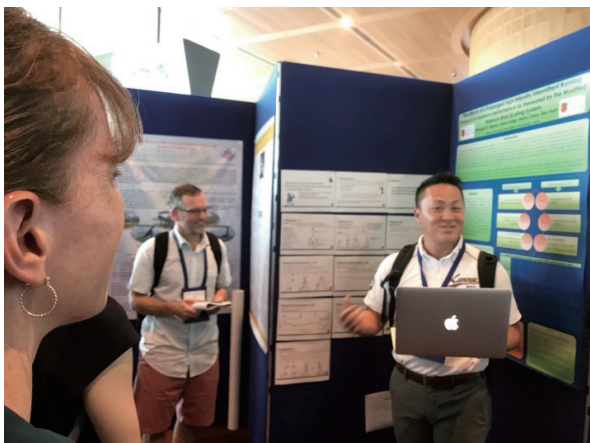
会場となった The CCD

### 研究発表について

学会の一般発表は、「Oral & Invited Presentation」, 「Mini-Oral Presentation」, 「Conventional Print Poster Presentations」, 「e-Poster screens」に分かれており、私の発表は、Conventional Print Poster Presentations (ポスター前にて2分間発表と2分間の質疑応答) だった。私が今回発表した研究テーマは、「Operating factors that determine the accuracy of throwing to second base in the baseball catcher」であり、野球捕手における二塁送球の正確性を決定する動作要因を検討するものであった。発表後の質疑応答にて、「捕手の捕球コースにより結果が異なるのではないか」という質問を受け、方法論上

\* 鹿屋体育大学大学院体育学研究科博士後期課程3年

の限界点について再認識することができた。わずかな時間ではあったが、口頭発表ということもあり、自身の研究成果を英語で伝えられるか不安であったが、他の日本人参加者や当日のチェアマンに助けていただき、新たな刺激を得ることができた。この度の経験は、今後の博士論文の作成や研究活動にあたり、有意義なものであったと感じる。



発表時の筆者の様子

#### おわりに

学会発表に限らず、国外に赴くこと自体が自身初の経験であり、非常に有意義な経験となった。学会発表を通して、英語力に限らず研究力での実力不足を痛感したが、自身の研究課題に新たな展開を期待できる知見を得ることが出来た。そのため、今後もこのような国際学会に積極的に参加できるように、日々努力していく所存である。最後に、本学会大会に参加・発表するにあたりご支援いただいた前田明教授および共同研究者の皆様、現地にてご助力いただいた萩田太教授、本学職員の皆様に厚く感謝の意を表します。